もっとゆっくりした時代になるといいなー2070年の世界と日本社会

伊藤公雄

今から五〇年前といえば、一九七〇年。ちょうどぼくが高校を卒業した年だった。この一九七〇年を前後して、経済の発達した諸国の多くでは「若者の反乱」が広がっていた。あれから五〇年、なんだかアッという間だった。

最近は、「あの時代」について、国際的にも「一九六八（年）」問題として「歴史」的に分析する動きが広がっている。いろいろな分析の方法があるだろうけれど、基本的に、この時期、文明の転換点が生じていたのは誰の目にも明らかだろうと思う。トフラーの「第三の波」をはじめ、「知識社会論」「情報社会論」といった言葉がこの時期流行した。最近の日本政府の用語 Society5.0 の視点にたてば、一九七〇年前後はその前段階の Society4.0 だろうし、いわゆる第四次産業革命論の視点からみれば、蒸気機関による第一次産業革命、電気エネルギーを軸にした第二次産業革命に続く、情報革命としての第三次産業革命の時代の始まりがこの「一九七〇年」前後の時期にあたるということになるだろう。経済学の分野なら、大量生産大量消費と労働者の賃金上昇によって展開したフォード主義から、よりフレキシブルな生産と労働へと転換したポスト・フォーデイズム時代の登場も、このあたりが画期だったはずだ。

あの時代、確かに大きな「変化」が感じられた。毎年、身の回りの「風景」が

変容していった。新幹線や高速道路の登場を始め、交通機関の広範囲にわたる高速化は急速に進んでいった。建物も高層化を含めて大きく変化した。テレビの普及は、それまでのものの見方を根本的に変えた。とにかく身近な「風景」そのものが変化したのだ。

あれから五〇年の時間が経過した。とはいっても、当時想像していた「五〇年後の未来」イメージと比べると、「なんだか風景は一九七〇年前後以来、あまり変わっていないな」というのが実感だ。パソコンやインターネットの普及、スマホによるコミュニケーションの変容は確かにあった。AI だ IoT を軸にした Society5.0 や第四次産業革命の時代も始まっているらしい。とはいえ、こうした変化は、「風景」までは根本的には変えていないように感じている。

いや、確かに「風景」は変わり始めている。ただし、それは日本や欧米の風景ではない。アジアや南米、中東やアフリカの風景は、今や、都市部はどこも一九七〇年代に日本で広がった「風景」に似ている。お店の感じも、レストランも、駅も空港も、どこでもみな同じような「景色」に見える。

たぶん、五〇年後も、高層化や交通網の新たなネットワーク形成は別にして、都市や建物の風景は、基本的にあまり変わらないのではないかと思う。農村や漁村も風景も含めて、世界中がみな同じような雰囲気になっていくのではないだろうか。

でも、生活のスタイルは、たぶん今とは大きく異なっているのではないか。もっと「ゆっくり」した生活が、次の五〇年の間に世界中で広がっていくように思うからだ。ゆっくり起きて、身近な仕事場でちょっと仕事をし、自然とふれあい散歩を楽しむ。自由時間は、家族や友だちとおしゃべりし、自分なりのクリエイティヴィティのある仕事をする。夜は自分たちで作った料理をお酒とともにおいしくいただく。まるで、マルクスとエンゲルスが『ドイツイデオロギー』で描いた共産主義の社会だ（とはいえ、マルクスたちが望んだようには経済格差は縮まないだろう。不平等状況は国境を超えて＝つまり国内格差の問題としてではなく、グローバルなレベルでの格差の形で残っているだろうと想像している）。

なぜ、「ゆっくり」の社会がやってくるのかといえば、もちろん AI や IoT の発達による労働からの一定の解放の可能性ということもある。でもそれ以上に、この一〇〇年から一五〇年の間の「急ぎすぎ」の社会に、そろそろ人類は耐えられなくなっているのではないかと思っているのも大きな理由だ。

実際、現代社会においてもその兆しは見え始めている。現在三〇代くらいの世代と上の世代の間には、明らかに「断絶」があるように感じている。効率と速度を求める上の世代と「もっとゆっくり生活を楽しみたい」若い世代の間には、すでに大きな「段差」がある。ただ、「優しい」若い世代は、効率の構造に不満を抱きつつも、あまり文句も言わず、上の世代に合わせているため、この「段差」

は顕在化してはいない。

もっとも、現在社会を担っている世代に、「効率と速度を軸にした近代社会の論理」が本格的に身についているかといえば、そうでもないのかも知れない。むしろ、より上の世代、つまり戦後日本社会を形成してきた「戦前・戦中世代」の生み出した組織運営の構図を、表面的に維持しているだけのようにも見える。そこでは、社会や組織の目標を集団として達成しようという（戦前・戦中・戦後を貫いてそれなりに存在した）エートスは見失われ、個人の目標達成（他者をはね除けても自分だけが生き残りたい）と、（自分を守ってくれる）組織防衛のために過剰なまでの組織への同調（忖度の文化）のみが蔓延しているように見える。この世代の引退までは、日本の停滞は続くのかもしれないとさえ思うほどだ。

付け加えれば、こうした現代日本の組織や社会の構図を支えているのは、男性たちだということも考えるべきだろう。この三〇年ほど続く日本社会の停滞（GDP が五〇〇兆円前後という成長なしの状況）は、過剰同調で均質的な組織文化にしがみついてきた男性たちが生み出したものだと思っているからだ。

もし日本社会が、国際的にも「いくらかましな」（普通の経済社会）状況を生み出したいなら、女性の参画（エスニシティ、世代、障がいのあるなしなども）を含む、多様性にむかって社会を開けるかどうかにかかっていると思う。近代西洋の一種均質を求める文化と比べれば、伝統的にははるかに（人間と自然、人間

と人間の関係において）多様性を保持していたはずの日本文化の見直しなども、ここには含まれるのだろうと思う。

ちょうど二十年くらい前、衆議院選挙に立候補した友人にたのまれて、政策をまとめたことがある。「日本ゆっくり党宣言」とでもいえるものだったと思う。ここで、ちょっとさわり（一部修正しています）だけ書いておこう。

日本ゆっくり党宣言（案）～もっとゆっくり！ もっと多様に！ 21 世紀の社会デザインの提案

① もっとゆっくり！（有機農業を軸にした地産地消のスローフード社会へ！エネルギーの過剰使用を抑えつつ、自然エネルギーを軸にしたエネルギー転換へ！原発もリニアモータカーもいらない！）②もっと多様に！（市町村の権限を強化し、ボトムアップ型の多彩な地域社会の確立を！ジェンダー平等の実現と多様性に開かれた社会へ！性的指向と性自認の多様性を認め合える社会へ！多様な家族のあり方を認め合い、子ども手当を始めとした家族政策の拡充を！多文化共生社会の基盤作り＝外国人の人権保証のための法整備を進めよう！）③もっとゆったり！（基本的福祉政策を維持しつつすべての人に行き渡るベーシックインカムの実験を！ワークファミリーバランスの徹底を！安価な住宅提供と公的長期休養施設の拡充を！）④もっとしっかり！（法人税強化-高額所得者や不労所得への税の徴収強化を！ハコモノづく

りから生活基盤充実-生活インフラの整備拡充へ！自衛隊を専守防衛・災害対応の国土防衛隊と救援・医療・武装解除を軸にした国連待機軍へ再編成を！）

五〇年後には「古い証文」になっていることを祈るが、さてどうだろう。

本格的な「ゆっくり社会」に日本が離陸できているかどうか？これが五〇年後への問いかけということになる。